

国際ワークショップ報告

『中間／遠赤外線天文学と今後のスペースミッション』
Mid- and Far-Infrared Astronomy and Future Space Missions

新しい世紀を目前に、大型の宇宙望遠鏡の計画が準備段階に入っている。ハッブル宇宙望遠鏡で目覚ましい成果を上げている NASA を中心としたグループでは、NGST (Next Generation Space Telescope) という 8 m 級の望遠鏡を 2009 年に打ち上げることを計画している。NGST は HST の延長線上の計画として、可視光から近赤外線波長帯での高感度・高空間分解能観測を行うことを目標にしている。ISO により、幅広い赤外線波長帯での観測を成功させた ESA を中心としたグループは、2007 年に FIRST (Far Infrared and Submillimetre Telescope) というミッションを予定しており、この計画で遠赤外線からサブミリ波帯での高感度な観測を実現しようとしている。日本では宇宙科学研究所の赤外線グループが中心となり、2003 年に ASTRO-F (IRIS) を打ち上げるための準備を進めている。ASTRO-F 計画では、遠赤外線波長帯での全天サーベイ観測と近赤外線から遠赤外線波長帯での指向観測を予定している。さらにその次の目標として、中間赤外線波長帯から遠赤外線波長帯での高感度・高空間分解能観測を目指し、口径 3.5 m の冷却宇宙望遠鏡を 2010 年に実現すること



ワークショップの参加者

を計画している (HII L2 計画)。

2000 年 4 月 17 日、18 日に宇宙科学研究所大会議室で行われた国際ワークショップには、上記のミッションでの中心的役割を果たす研究者を含め、国内外から 120 名の研究者・学生が参加して行われた。組織委員の松本敏雄委員長による冒頭の挨拶でキックオフされたワークショップは、今後さらに科学的な重要性を増す中間～遠赤外線波長帯での天文観測の意義や大口径冷却宇宙望遠鏡による高空間分解能観測の必要性、そして今後のミッションを実現するのに必要な技術的なブレークスルーに関する議論が非常に活発に行われた。また 2 日目のセッションの最後には、各プロジェクトを代表する研究者がパネルディスカッションを行い、将来の世界規模での国際協力に関する議論も行われた。また HII L2 計画のニックネームも会期中議論が行われ、SPICA という名称が提案され、ワークショップを締めくくった。尚、このワークショップの集録は ISAS Report Special Edition という形で発行準備が行われている。

上野宗孝 (東京大学大学院・総合文化研究科)



ティーブレーク中のフリーディスカッション風景